

迷える 英語好きたちへ

鳥飼玖美子

Torikai Kumiko

斎藤兆史

Saito Yoshifumi

目次

まえがき 鳥飼玖美子

第一章 対談 1 英語民間試験導入狂騒曲

大学入試の「民間試験」導入とは何だったのか？／五〇万人の「話す力」を測れるのか？／試験の数が多すぎて、公平性が担保できない／採点者も採点基準も曖昧／民間試験にもミスやトラブルはある／山積する技術的な問題／撤退したTOEIC／学校の勉強では受からない試験を生み出すシステム／延期ではなく中止に／身の丈発言／頑張っていたセンター試験／学習指導要領に沿っているという詭弁／民間試験の未来はどうなるのか？

第二章 「四技能」という「錦の御旗」

鳥飼玖美子

英語四技能の論理／「四技能」という言葉の力／外国語教育における「四技能」／「四技

能」は古い!? 今は「七技能」だ! / コミュニケーションを成立させる「仲介」 / 「四技能」のこれから / コロナ以後の社会に英語は必要か?

第三章

四技能信仰の問題点

斎藤兆史

57

四技能への「ダウト!」 / 四技能には考える力は含まれていない / 英語の四技能をバランスよく教えるのはいいことか? / 英語の四技能をバランスよく測るのはいいことか? / 英語教育のお題目に惑わされないこと

第四章

対談2 日本人の英語の現在、過去、そして未来

「小学校英語」で何が起こっているのか? / 「先生も学習者」でいいのか? / 英語の先生が間違えるかもしれない、という危うさ / ハイテンションな英語授業 / 英語の間違った使い方 / 間違った英語の刷り込み / ネイティブ教師もピンキリだ / 通信講座で英語の先生になれる? / 日本から英語教師がいなくなる? / 教育環境の劣化 / 入門期の手ほどきこそ大切なのに / 英語教育改革は、なぜ間違っているのか? / 英語教育の歪みの原点は / 「高接続」問題 / フェンシングに英語は必要か? / 「英語での授業」が必須になると…… /

67

英語で「自己植民地化」する日本人／英語だけでノーベル賞はとれない／民間業者任せでいいのか？／高価な教材は必要ない／語学のプロ「通詞」の勉強法／洗練されていた戦前の英語教科書／平泉・渡部の英語教育論争／「教養か実用か」が問題ではない

第五章

カタカナ語を活用した英語学習

鳥飼玖美子

121

カタカナ語とは何か？／新型コロナウイルス感染症対策で頻出したカタカナ語／「オーバーシュート」の overshoot／オーバーシュートをめぐるミステリー／東京アラートの不思議／英語学習の教材として使う／新型コロナウイルス感染症についての名スピーチ／コミュニケーションとしての言語使用

第六章

日本語を脅かすカタカナ英語

斎藤兆史

145

ピークアウト、インバウンド——カタカナ英語の感染力／なぜカタカナ英語が先なのか？／専門家の責任／日本語の生態系を守るべき／カタカナ英語拡散のカラクリ／カタカナ英語を聞いても慌てないこと

第七章

メディアの英語講座

鳥飼玖美子

メディア英語講座の役割とは何か？／「百万人の英語」とNHK「英語講座」／NHK「テレビ英会話」／「テレビで留学」／「歴史は眠らない：英語・愛憎の二百年」／「ニュースで英会話」／「世界へ発信！SNS英語術」／ウェブとラジオ「世界へ発信！ニュースで英語術」／テレビ英語番組のこれから

第八章

実用と教養のはざままで

——私が関わった英語番組

斎藤兆史

「英語でしゃべらナイト」／「3か月トピック英会話——話して聞きたる！ネイティブ発音塾」(二〇〇九、二〇一〇年)／「3か月トピック英会話——聴く読むわかる！英文学の名作名場面」(二〇一〇、二〇一二年)／NHKラジオ「原書で読む世界の名作——チャールズ・ディケンズ」「デイヴィッド・コパフィールド」(二〇〇一年)／NHKラジオ「見つけ合う英文学と日本——カーライル、ディケンズからイシグロまで」／放送大学

第九章

文学を用いた英語学習法

斎藤兆史

191

すぐれた英語教材としての文学作品／名作冒頭の一文だけで英語の復習／英語に時制は二つしかない／主人公が語り手／一気に物語の結末へ／おすすめの英語文学作品

第一〇章

英語で文学作品を楽しむ

鳥飼玖美子

209

文学の知識が英会話に生きる／世界の名著を英語で読んでみよう

あとがき 斎藤兆史

218

まえがき

二〇二〇年は、世界が「新型コロナウイルス感染症」(COVID-19)に襲われた年として記録に残るでしょう。日本ではそれに加え、英語教育が混迷を深めた年として記憶されるのではないのでしょうか。

大学入学共通テストにおける英語民間試験導入は二〇一九年一月一日に延期となりましたが、問題解決に至らないうちに新型コロナウイルス感染症が拡大し、三月には全国の学校が休校となりました。休校措置で遅れた学びを取り戻すために「九月入学」案が検討されたり、オンライン授業に切り替えたりする試みが続きました。

社会を揺るがした新「大学入学共通テスト」は二〇二一年一月に初めて実施予定ですが、本試験の日程を二回に増やすことを巡って賛否両論。二〇二〇年四月から開始の小学校五・六年生「教科としての外国語(英語)」は、分散登校などで通常の授業を行えないこ

とから事実上半年で全てを終えなければならず、教員研修も実施できず、混乱したままです。海外留学や実習がままならないなか、多くの大学がカリキュラムの再考を迫られていますし、オンライン授業は教師にとって負担が重いだけでなく、学生にとっては「教員と対面しての学び」「キャンパス生活」を失っていることになり不満が鬱積^{うっせき}しています。教育全体が揺らいでいるのが二〇二〇年だと言えそうです。

そのような状況下に刊行となる本書の発端は、二〇一九年『k o t o b a』秋号から連載の対談「亡国の英語教育——日本人と英語の未来」です。斎藤兆史さんとは、それまでも数々の講演会やシンポジウムで一緒していたので、話が弾み、連載は二〇二〇年春号まで三回続きました。その連載対談を新書にしようという案が出た際に、斎藤さんと私が気にしたのが、二人の主張が同じ方向であることでした。主張が真っ向から対立している二人なら対談すると面白いでしょうが、基本的には同じ意見の二人が語り合うのって、どうなのだろう、という漠^{ぼく}たる不安でした。

そこで考えたのが、対談と書き下ろしを組み合わせることでした。これは私にとっても初めての試みとなりますが、たとえば「英語の四技能」については、口頭で話し合うより、二人の持論をそれぞれの専門に立脚して書いた方が深まるのではないかと。幸い、斎藤さん

と私は専門分野が違います。斎藤さんの専門は英米文学であり英語文体論です。そこに英語学習論が加わって、英語教育のあり方について発信を続けておられます。鳥飼は、異文化コミュニケーションを軸に言語教育と通訳・翻訳について考察しています。そこで二人が別々に書いてみたところ、同じ「四技能幻想」批判でありながら、斎藤さんは、私とは全く異なる視座から斬り込んでいて、私にとっても改めて学ぶことが大でした。

新書の企画を練っている頃は、新型コロナウイルス感染症対策に関する「カタカナ語」が、「クラスター」「オーバーシチュート」「アラート」「ウイズコロナ」など乱発されており、これについても書かなければと、二人が別々に論じました。

さらには斎藤さんと私は、ラジオ・テレビの英語講座での講師を経験していることから、それぞれの出演番組について書いてみたところ、斎藤さんがNHK「英語でしゃべらナイト」に出演された際、パツクン（パトリック・ハーランさん）は日本語で、斎藤さんは英語で話したこと、「3か月トピック英会話」では紛らわしい発音をちりばめたスキットを斎藤さんが作られたことなどを、初めて知りました。私にとっても、これまで関わった番組を振り返り、テレビ英語講座の将来を考えてみる良い機会になりました。

また、近頃の英語教育が実用に傾斜しており文学が顧みられないことから、あえて「文

学を用いた英語学習法」の章を設け、斎藤さんが文学と英語学習論の知見をふまえて指南しています。なるほど、こうやって小説を分析して読むと英語力がつくのだ、と納得しました。

斎藤兆史さんと私は、英語教育専門家として旧知であり議論することも多いのですが、今回は新たな切り口で論じ合うことができたように思います。いつも穏やかで冷静な兆史さんですが、英語教育の話になると舌鋒鋭くなります。その真骨頂が本書の随所に表れていますので、ぜひ味わっていただきたいと願っています。

新型コロナ禍の九月、東京にて

鳥飼玖美子

第一章 対談 1 英語民間試験導入狂騒曲

大学入試の「民間試験」導入とは何だったのか？

鳥飼 二〇一九年一月に、大学入試改革の目玉だった英語民間試験の導入が「延期」となりました。しかしその後の動向を見てみると、とりあえず実施は先延ばしにして、本質的な問題に立ち入るつもりはないような気がします。

齋藤 延期ではなく、中止を決定してほしかったところですがね。もともと、民間業者にとっては五〇万人規模のマーケットですから、とてつもない儲けの機会だったはずです。

二〇一九年にこの問題が大きく報道された頃には、「どうやら背景に、民間企業と政界・官庁・学界の癒着の問題までありそうだ」という疑惑も取り上げられ、ひどい話だと思つた人も多かつたでしょう。しかし、民間試験の推進派は、この点さえなんとか取り繕えれば、再び議論の対象になると考えているのでしょね。

鳥飼 文科省は今回の英語入試改革について、「従来のセンター試験は『読む・聞く』の二技能だけだからダメだった、これからは『話す・書く』の技能を加えた『四技能』を測定する民間試験を使うことにする」としていました。これは、「このグローバル時代、大志を志す者は、みな英語を話せなければならぬ」ということになります。

齋藤 いわゆる「発信のための二技能が重要だ」という議論ですね。英語を「書く」能力

は大学の二次試験でも問われるので、これを理由に高校生にも勉強させることができる。ところが「話す」ほうは、「今までの入試にスピーキング・テストがなかったから話せないのだ」という誤解がある。そこから、この一連の改革は始まっています。

しかし、本来必要となるのは、高校で本格的にスピーキングを教える態勢を整えることのはず。ところが、その教育システムは不完全のまま、テストだけを見込みで始めようとした。これでは本末転倒です。

鳥飼 ひどいですね。制度設計がずさんどころか、行き当たりバッタリなので、失敗するのが目に見えているのに、ともかくやってみる。大混乱になってから反省しても遅いと思っていたら、本当にそうなってしまいました。

五〇万人の「話す力」を測れるのか？

齋藤 そもそも、大学入試に民間試験を導入するという発想そのものが、異常です。試験の基準や学生の答案が、文科省と大学の外に出るわけですからね。しかも誰が採点するのか最後まで明確にならなかった。

鳥飼 従来のセンター試験の後継である「大学入学共通テスト」に、英語民間試験を使う

ことになったのは、やはり元文科大臣・下村博文さんの影響でしょう。ご自身が塾を経営した経験があるので、教育は民営化するべきだという強い信念があるように思います。自民党が政権に復帰してすぐに設置された「産業競争力会議」の初回（二〇一三年一月二三日）から下村氏は大学入試改革を提案していましたし、「教育再生実行会議」につながる役割も担っていました。

でも不思議なことに、今回の英語民間試験は制度設計がずさんだ、欠陥だらけだ、と批判している人でも、相当数が「四技能でスピーキングを測るのはいいと思うんですけど……」という枕詞をつけるんです。「スピーキング・テストを行うことは賛成だけれど、民間業者ではなく大学入試センターがテストを作って行うべき」という主張が多いのです。齋藤 結局、なぜそこまでして民間試験を入れたいかというと、先ほどのように、「従来の『読む・聞く』の二技能のテストだけではダメだから、四技能を問う」という話ですよね。なぜなら、日本人は英語が「話せない」から。そして、それは入試が悪いからだ——と堂々巡りになってしまふ。

鳥飼 これまでセンター試験を担ってきた大学入試センターは、経験からして「話す力の測定は、そんなに簡単にできない」ということを知っているはず。個別入試ならとも

かく、五〇万人ものスピーキング・テストを一斉に行つて公正に採点するなんてことは、ほとんど不可能でしょう。

斎藤 だからセンターは「あえて」スピーキングの問題を作ることは放棄したのだろうと思えます。一般の人のなかには、「大学入試センターに能力がないので、民間業者に頼んだのだろう」と見る人もいるようですが、実はそうではないんですよ。

試験の数が多すぎて、公平性が担保できない

鳥飼 大学入学共通テストへの民間試験導入については、自民党の教育再生実行本部での議論が二〇一三年に報道されて以来、ずっと問題が指摘されてきましたが、政府の教育再生実行会議での提言が文科省に下り、概要が明らかになると懸念の声は高まりました。

まずは入試で最も重視されるべき「公平性」の観点からのものです。親の経済力や地域格差によって民間試験を受ける準備に違いが出れば、個々の受験生のスコアに影響するはずです。何度も試しに受けて対策講座に通ったりすることが可能な家庭の受験生の方が圧倒的に有利になるのは目に見えています。しかも、文部科学省が大学入学共通テストで活用しようとしていた民間試験は、七業者八種類。レベル別も含めたら二三種類もありまし

た。

齋藤 そんな多種多様な民間試験を、入試の合否判定に活用してどのように公平性を担保できるのか、当然疑問がわきますよね。

鳥飼 そこで出てきたのが、欧州評議会が二〇〇一年に作ったCEFR* (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment / 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠) です。CEFRには、基礎の「A1」から、熟達した言語使用者である「C2」まで、六つの等級がありました。今は一阶段に増えています。文科省は二〇〇一年版CEFRを使い旧来の六段階に各民間試験の得点を換算すればいい、という発想です。

齋藤 TOEFL、英検、GTECなどバラバラなスコアも、CEFRのレベルに置き換えれば、比較対照は可能だというのが、文部科学省の主張です。具体的には、大学受験では「A2」レベル以上のスコアを出願の条件とする、という話になっていました。

鳥飼 しかし、実はCEFRは、欧州評議会の「複言語主義」を実現するために作られたものなのです。複言語主義とは「母語の他に二つの言語を学び、相互理解から世界平和に結びつけよう」という理念です。CEFRでは、どの言語を学んでも、たとえば「私は日

本語A1、スペイン語C1」などと共通の尺度で評価ができることを目的としています。ですから六つの等級は、あくまで参考として、ざっくり分けただけのものなのです。民間試験に換算することが目的ではなく、能力記述文によって自己評価をすることと、教師による客観評価で今後の学習をどう指導するかの判断に使います。

欧州評議会は、次のようにはつきりと書いています。「この参照レベルは絶対的なものではない。各教育機関で自由に変えてよい」。すなわち、CEFRの尺度はどの言語にも共通に使える枠組みであって、レベル分けが重要なのではない。だから、同じ「A2」でも、たとえばスペインとスイスとイタリアとは違うことがあります。

つまり、何をもって「A2」とするのか、その絶対的な基準が示されているものではないのです。そんな緩やかなものを、大学入試の出願要件に使うということ自体が乱暴な話なんですよ。

齋藤 しかし、その時点ではもう、引っ込みがつかない状態になってしまった。

鳥飼 欧州評議会は二〇一八年に、「CEFRは国際標準ではない」と明言していますし、「我々は監視したり調整したりする機関は持っていない」とも明記しています。

齋藤 いろいろな民間試験があるなかで、「X社よりY社の試験のほうが、いい点数が取

れて、A2認定がもらえそうだ」ということになれば、受験生はY社の試験を受けるようになるでしょう。すると業者側からすれば、「受験生を集めたい、儲けたい」わけですから、自分が実施する試験の難易度を下げようとする。そもそも基準が明確ではないのですから、そうした事態が起こらないとは言いきれませんよね。

公平公正を身上としてきた大学入試に、こういった営利的な発想が堰を切ったようになだれ込んでくるのではないか——そんな懸念が生じるのは当然です。

*CEFRを「セファール」と表記するのは不正確。読み方は「セフ・アール」。ヨーロッパの研究者はC-E-F-Rとアルファベットで区切って発音することも多い。

採点者も採点基準も曖昧

鳥飼 その営利企業である民間試験団体が、どのように試験を実施し、採点するつもりだったのか。特にスピーキング・テストの採点は極めて難しい。きちんと採点するためには、専門知識のある採点者を多数確保しなければならぬはずですが、それには当然、経費がかかります。

齋藤 採点者はおろか、誰が試験官になるのかすらも、なかなかはっきりしませんでしたね。

鳥飼 毎年五〇万人以上が受験するわけですから、概算すると、採点者は全体で一万くらいは必要になります。実際、国語や数学の記述式問題の採点には約一万人が必要と見積もられ、採点を請け負った民間業者が大学生アルバイトを採点に動員することが判明して、批判が殺到。国会でも取り上げられ、結局、見送りとなりました。

齋藤 公正な基準で問題を作成し、専門家にきちんと採点してもらおうとしたら費用がかかる。でもきちんとやらなかったら受験生も保護者も黙っていない。下手をすると、訴訟問題にもなりかねません。

鳥飼 スピーキング・テストの場合、採点者の資格要件や採点基準をなかなか明らかにしない民間試験業者もありました。公表されている団体の採点基準を見ても基準がそれぞれ違うので、受験生は調べるだけでも手間ひまがかかります。

そのようななか、産経新聞が、「複数の試験が採点を海外で行う方針」（二〇一九年九月八日付）と報じました。それによると、まずケンブリッジ英検は、「書く」試験を英国で採点、「話す」は日本で採点。採点者に求める要件は「英語の教授資格、一八〇〇時間の英

語指導経験」。またIELTSは、「採点は日本だが、一部海外実施の可能性も」。採点者の要件は「英語の教授資格、三年以上の指導歴」などとしています。

これに対し、日本の民間試験は、採点者に求める要件や資格が曖昧なままでした。英検の採点は「日本、一部海外実施の可能性も」あり。採点者の要件は「英語力を証明する資格、英語教育の経験」です。ベネッセの採点は「アジアや欧米など海外の複数箇所」で、採点者に求める要件は「面接や試験に合格すること」。要するに、ベネッセが面接して選べば採点者になれる、ということなのでしょう。

民間試験にもミスやトラブルはある

鳥飼 また、出題や採点のミスがあったらどうするのかという問題もあります。今までは民間の検定試験だからあまり表に出てきませんでしたが、共通テストの一環として実施する場合も、「民間事業者等の採点ミスについて、大学入試センターや大学が責任を負うことは基本的には想定されません」というのが文科省の見解です。

個別の大学でこの種のミスが起きた場合は、新聞発表や記者会見で、事実関係の説明や救済措置を公表するなどの対応が不可欠です。しかし民間試験は、従来そこまで厳密な対

処はしてきませんでした。

実際、最近でも民間試験で問題が起きたことは海外でもあるんです。二〇一九年にアメリカではSAT（大学進学適性試験）をめぐる不正疑惑が発覚して逮捕者が出るなどの騒動が起きています。TOEFLでは過去に何回か替え玉受験が告発されています。でも日本では、それほど大きくは報道されませんでした。

齋藤 イギリスでも、組織的な不正があったため、たとえば学生が留学ビザを取るための英語力の証明として、TOEIC、TOEFLはともに使えなくなっています。いずれもアメリカの非営利団体ETSが運営するテストですね。イギリスとしては、自前のIELTSがありますので、それを使いたいという思惑もあるんでしょうけれども。

鳥飼 つまり民間試験でも、出題ミスや、不正は過去に何度も起きている。これが国として実施する大学入学共通テストで起きたら大変なことになってしまいます。

山積する技術的な問題

鳥飼 ところで、従来の英検は対面の面接でスピーキング・テストを行ってきました。ところが、大学入学共通テストは五〇万人規模ですから、試験官が足りない。そこで、面接

は障害のある方だけにして、一般の受験生は、一人一台のパソコンとヘッドセットを使うコンピューター・テスト（CBT）を受けることになりました。

この新たに開発されたコンピューター・テストは、ふつうの英検にも導入されたのですが、二〇一九年九月、システムトラブルで突然パソコンが動かなくなつて、五二人が受験中止になつてしまふという事態が生じたのです。再試験を認めたそうですが、ふつうの英検だからそんなことを言つていられるわけで、入試だったら、どう責任をとるのでしょうか。齋藤 ベネッセだってそれは同じですよ。GTECのスピーキング・テストはタブレットを使用しますが、それだって動かなくなる可能性がある。

鳥飼 二〇一九年四月に行われた「全国学力調査」では、中三英語の「話すこと」の問題でトラブルがありました。受験者が機器を通して解答する声を録音するのですが、計一万五千人以上のデータに不具合がありました。録音した記録はあるのに音声データがない、音声データはあるけれど雑音で聞きとれず採点できない、というトラブルです。文科省は、こうしたトラブルが大学入試でも起きかねないと質問した記者に対して、「あれは各学校の対応でやっていたから」と説明したようですが、民間業者に任せれば大丈夫とは言い切れません。

こうした技術的な問題に関連して、当時の柴山昌彦文科大臣が批判されました。大臣は当初、「受験生が心配なく受けられるシステムづくり、そしてきちんとした質を確保する」と言ったのですが、それを文科省がやりますと言うのかと思ったら「民間試験業者にお願いいたします」と発言し、猛烈な批判を受けました。

齋藤 文科省の公式サイトでは、大臣がGTECのスピーキング・テスト用のイヤーマフを着けている写真まで出していましたね。

鳥飼 そう。スピーキング・テストでは、隣の人の声がうるさくて落ち着いて話せない、あるいは隣の生徒が話すのを真似する受験生が出るといった危惧があり、周囲の声を遮るような形状の防音用イヤーマフをベネッセが開発したんですね。それを大臣が実際に体験したという写真を掲載し、同時に「公式サイトはこちら」とGTECと英検のサイトにリンクを張ったんです。それでまた叩かれた。「文科省はGTECと英検の広告塔か」と。

これに対して柴山大臣は、自身のTwitter（ツイッター）で「国会での求めに応じ、問題があるか真摯に調査に行ったのに、それはないでしょう」と反論（二〇一九年六月二八日）。齋藤 まさに「逆ギレ」状態でしたね。でも、この惨状を見ると、まさに業者に丸投げですね。

鳥飼 丸投げもいいところですよ。文科省も、本当はこんな丸投げでいいとは思っていないでしょうが、「(大学入試英語成績提供システム) 参加要件」は「法的根拠に基づく認定制度ではない」ので、あくまで参加事業者に対して「お願い」するしかないわけです。

撤退したTOEIC

鳥飼 英語民間試験導入を決めた際には、簡単な参加要件だけで参加を募ったのですが、世論が厳しくなるにつれ、文科省からの要請が次々と出され、民間試験業者も負担が重くなったと思われます。

二〇一九年七月、当初の条件より運営が複雑になったことで責任を持ってないと判断し、TOEICを運営する国際ビジネスコミュニケーション協会が「『大学入試英語成績提供システム』への参加取り下げ」を発表しました。

齋藤 「受験申込から、実施運営、結果提供に至る処理が当初想定していたものよりかなり複雑なものになることが判明」「責任をもって各種対応を進めていくことが困難であると判断」というのが理由だそうです。

鳥飼 TOEFLは、高校三年生が受験できるような Junior Comprehensive Test という、

四技能を測定するコンピューター・テストを開発していたのに、参加申し込みをしませんでした。これもやはり、採算がとれないと判断したためと言われています。結局、TOEFLは、TOEFL iBTテストだけが参加しましたが、これは受験料が高いたけでなく、試験時間も公式ウェブサイトでは「三時間」ですが、日本人は概ね四時間から四時間半かかっているようです。もともと北米の大学・大学院で学ぶために必要な英語力を測定する試験ですから、かなり高度な内容で、高校生には難しすぎます。

学校の勉強では受からない試験を生み出すシステム

鳥飼 民間試験によって、受験生の費用負担が増えることも問題になりました。

従来であれば、入試センターに三教科以上で一万八〇〇〇円の検定料と、志望大学に受験料を払えばよかった。それが、民間試験が導入されれば、英語は大学入学共通テストとの二本立てになってしまいます（二〇二四年度には英語は民間試験に一本化する予定とされていたので、それまでの措置）。つまり、英語に関しては、大学入試センターとは別に、民間業者に受験料を払って試験を受けなければいけない。一回の受験料は、最低でも六千円くらいから二万数千円の民間試験もあります。

「二回までの結果を大学入試センターに提出できる」と親切そうに言われるけれど、二回なら受験料は二倍になります。それに、二回ではすまない。生徒はみな、早ければ高校一年生の段階から受けて、試験に慣れておきたいと思うでしょう。試験に慣れれば、スコアは上がる可能性は高いわけですから。民間試験導入が議論されている間にも、民間試験実施業者は対策講座を始めたり、対策本を売り始めていました。

齋藤 テストのための教材を、テストをする業者自身が作って販売するわけですからね。それを買えば、合格に近づくような仕組みになっている。

鳥飼 民間試験業者によっては、高校でまとめて一括して申し込むようになっていて聞きました。高校から「この教材を使いますから買ってください」と言われると、保護者は「うちは要りません」と言いづらいじゃないですか。仕方なく買ってしまふ。そのお金は民間業者に入る。これが利益相反ではなくて何なんでしょうか。

先日、ある県の高校の先生たちと懇談していて、民間業者がどれだけ学校に入り込んであるかという話を聞きました。その高校は英語教育に熱心に取り組んでいるので、売り込みに来た民間試験業者に「民間試験は学習の成果を測るんだから、ふだんの英語の授業でしっかりと指導すれば大丈夫ですよ」と言ったところ、「とんでもない。ウチの試験用の

対策をしつかりさせないと、いいスコアは取れませんよ。保護者や生徒から文句が出ていいんですか!」と、過去問などの教材を強く勧められたそうです。

齋藤 おかしな話ですよ。 「一点刻みの点取りのためにあくせくするのはよくない」という理由で改革するはずなのに、結局、今までの「受験対策」と同じことになってしまふ。

本来、大学入試だって、一人でコツコツ努力して勉強している人なら解けるはずの問題を出題してきたわけです。逆に言えば、入学試験で、個人が一人でコツコツ努力してできないことを測るべきではない。民間業者の教材を使えば試験の点数が上がるような、そんなシステムにしてはいけませんよ。

鳥飼 多くの高校は、英語の授業をつぶして民間試験の模擬テストをやるような実態になっっているんです。共通テスト対策で。

さらにおかしなことに、英語以外の外国語は、民間試験ではなく、これまでどおり大学入試センターが試験を作るそうです。「なぜ英語だけ民間試験なのか?」と思いますよね。ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語などで受験すれば、大学入試センターに既定の受験料を払うだけでいい。英語民間試験の費用を払わないですむ。英語だけは民間試験業者に別途、受験料を払わなければならない。受験生にとっては費用の点で不公平が生じます。

齋藤 受験料だけで万単位、教材も買うとなればさらに高額になりますからね。

延期ではなく中止に

鳥飼 この騒動では、二〇一九年の半ばから、受験を控えた高校生を含む若者たちが声を上げたことも印象的でした。

彼らが行動を始めたきっかけは、当時の柴山文科大臣が「サイレントマジョリティーは（英語民間試験に）賛成です」とツイート（八月一日）したことです。これには皆の怒りが爆発した感じでした。教育関係者だけでなく、若者たちも「私たちは大反対です」「黙っているで賛成だと思われてしまうのですね」「ならば声をあげます」という流れになった。

八月二四日、埼玉県知事選の応援にやって来た柴山氏に、「英語民間試験の中止」を訴えようとした大学一年生がいました。いくら反対しても何も動かないので一人で行動したわけですが、その学生がたちまち警官に取り囲まれてベルトを引きちぎられ排除される様子が動画で流れると、「入試改革で混乱している受験生の代弁をしたのに」とSNSで怒りの声が湧き上がりました。その後、毎週金曜夕方に文部科学省前で「大学入試改革反対」の抗議活動が行われるようになり、高校生や大学生も参加するようになりました。

齋藤 政治に無関心だと言われていた若者までが行動し始めたのは、珍しいことでしたね。
鳥飼 それまで政治には関心のなかった若者が、誰かに任せていては危うい、自分で考えて行動しないとダメなんだ、と気づいたことは大きいですね。

齋藤 教育の現場でも危機感が募っていました。全国高等学校校長協会は、七月に「生徒が希望する時期や場所で英語民間検定試験を受けられる見通しが依然として立っていない」など、六項目の不安要素をあげ、その解消を求めています。九月一〇日には文科大臣に対して「大学入試英語成績提供システムを活用した英語4技能検定の延期及び制度の見直しを求める要望書」を提出しました。こうした動きは非常に頼もしいものでした。

鳥飼 不安解消を求めたのに何も改善されないのです、そのようにせざるをえなかったとのことです。

齋藤 高校としては、不安だらけの改革で生徒たちが混乱することは避けたいのは当然ですし、大学側も次第に懐疑的になっていきました。一〇月四日に文科省は、全国の大学・短大計一〇六八校のうち、実に五〇七校が英語民間試験の採用を見送ることに決定したと発表しています。

迷える英語好きたちへ
鳥飼玖美子／斎藤兆史・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定価：本体 840 円 + 税
発売日：2020 年 10 月 7 日
ISBN：978-4-7976-8060-7

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)